次に、取り上げたいのは、**小松原蘭「妹」**（『季刊遠近』第72号　神奈川県）である。確かな筆力、適確な描写で、ヒステリー的症候を発する妹との関係を描き出す秀作である。

深夜の救急外来の待合室で、運び込まれた妹の診察を待っている主人公の緊迫した様子の描写で作品の中に引き込まれる。錯乱して暴れた二十歳の妹・妙子を主人公の姉は精神病院に連れてくる。妹は、通院による治療が必要なヒステリー状態だと診断され、同棲している青年・拓也の許から引き離して、姉の所から通院させるように医者は求める。しかし、主人公は、東京に出て数年、私立大学の事務員として多忙であり、とても妹の病気の面倒をみる時間的余裕はない。さらに妹の病気が自分に責任があると思っていて、そうした責任から眼を背けたいのである。

大阪の片田舎で育った主人公は、四歳の時交通事故で父を失う。妹は二度目の父の子供であり、異父妹なのである。家庭が平穏だった時、二人の姉妹は良好な関係だった。だが、主人公が十歳、妹が三歳の時、二度目の父が出奔して、その仲は決定的に壊れてしまう。優しかった義父に気に入られたいという一心から、主人公は母が集金した集落の夏祭りのお金の隠し場所を父に教えてしまい、そのお金を持って父は行方をくらましたのである。それ以来、一家の生活は逼迫し、母親の癇癪は父にそっくりな妹に向かい、思春期には妹は母に反抗的な態度で応じるようになる。主人公はそうした家庭環境から逃げ出すように上京し、懸命に働きながら悲惨な家庭状況を引き起こした自責の念から家に仕送りしているのである。姉を追うように上京した妹は、男と同棲しながら、過度に男に寄りかかり、男を縛り、気に入らないことがあるとヒステリー的な症状を示し、男に暴力を振るい、暴れまわってアパートの中を滅茶苦茶にする。とうとう耐えきれなくなった同棲相手は逃げ出す。主人公に対してナイフを握り、襲い掛かってくる妹と正面から向き合い、一緒







に病気を治していこうと決心するところで小説は終わる。

この小説は現代的な家庭からの「個」の自立という具体的な事柄を描きながら、象徴的な意味での「現代」を描けているところに優れた点がある。

まず、主人公は、父を子供の頃失い、死んだ父の記憶というものが欠如している。それは、単に父を知らないというだけではなく、「父なるもの」＝「規範」＝「象徴的な死」を失った現代的状況を示している。つまり、「汝為すべからず」／「汝義務を為すべし」という命法を持つ「父」＝「死」＝「規範」が欠如しているのである。

そして、二度目の父は、「優しい」父であり、子供に気に入られようとする父である、ということも象徴的である。つまり、彼は「汝享楽すべし」と命じる「淫らな父」なのである。そして、主人公は、「淫らな父」である二度目の父に気に入られようとするあまり、祭りに使うお金を渡してしまい、家庭崩壊の原因を作った自責の念から過度に自己管理する人間として設定されていることも象徴的である。つまり、「法」＝「死」から規定される「生」を知らず、「汝享楽すべし」という資本主義の「生」の倫理から逃げ出すことによってしか自分の生き方を作り出すことができないのであり、その為、過度に自分を管理せざるを得ないのである。

妹の方も象徴的存在である。妹は家庭において反抗し、非行に走ることによって、「権威」（ここでは母親）に反旗を翻し、逆説的に「権威」に繋がっていこうと試みる。しかし、「母」は「父なるもの」＝「権威」の代理として「子」を受けとめてくれない。逆に母親の中に蓄積された自分の攻撃性が跳ね返っていくのを受けとめるしかないのである。

主人公・姉の生き方は、「淫らな父」と「妹」との双方から規定されている。例えば、東京に出て来た妹の同性相手を、「父」に似ているから選んだのだろうと考え、自分の方は、「淫らな父」に「お前は美人になる」と言われた反動から男を遠ざけ、独身生活を貫いている。「姉」は過剰に、欲望・情動を遠ざけ、「妹」は過剰に欲望・情動を受けとめてくれる「他者」を求めて失敗する。「淫らな父」に似た「妹」の同棲相手が、「淫らな父」と同じように出奔してしまって初めて、取り残された孤児同士として「姉」は「妹」を受けとめ、「妹」と向き合うことを決心するのである。勿論、それは自分自身を作り上げて来た「淫らな父」／「妹のヒステリー」との関係に向き合うということである。

この作品は村上春樹の『１Ｑ８４』と同じ問題意識を抱きながら、『１Ｑ８４』のように荒唐無稽な結末になっていない点で優れており、大変感銘を受けた。